GST

水越和希

６年も付き合っているオトコと今もまだ一緒に暮しているのはどういうことか。惰性だ。家賃払えないし、ひとりになってやっぱりさみしいとか思うのは嫌だし。でも、だからといって結婚する気もない。お互いない。

塩焼きそばをフライパンの上でごちゃごちゃ混ぜながら、私はそんなつまらないことばかりを考える。どうでもいいことで頭をいっぱいにしておきたいのだ。

隣の部屋に住むソウとは四回程浮気をした。ソウ、というのはその男の名前で、私はソウのはっきりした名前を聞いていなかった。だからソウが創二なのか総一なのか宗一郎なのか知らなかった。

ソウのことは好きだが、しかし彼には杏ちゃんという可愛らしい彼女がいた。だから、付き合いたいとか、そういうわけでもない。奪ったり奪われたりとか、面倒だし。

これもどうでもいい話のはず。

私は溜息をついた。塩焼きそばは簡単にできるから好きだった。野菜を切って炒めて麺とタレを加えて混ぜるだけだ。コンロの火で手元は暖かいが足は寒い。今日は十二月二十八日で、時間は夜の十時半だった。オトコはまだ帰ってこない。

塩焼きそばがおいしそうに焼けたのでお皿に盛ってテーブルにつく。アパートの壁は薄いため、隣から二人で仲良くテレビを見ている声が聞こえてくる。そうか、今日は金曜日だった。お笑い芸人の声にまじって二人の声が聞こえる。会話の内容までは聞き取れないが、楽しそうな空気が寒々とした私の部屋に侵食してきていた。

杏ちゃんは高校生で金曜の夜ソウの家に泊まりに来て土曜の夜には帰っていく。どうせなら日曜も泊まっていけばいいのに、と思う。残念ながらセックスしている声が聞こえてきたことはまだ無い。そんな声が聞

こえてきたら、ちょっと面白いのに。だけど時々、急に会話が途切れることがある。

何、してるのかな？

テレビをつける。ニュースがやっていて、二駅先の街で銃の乱射事件があったことをアナウンサーが読みあげている。酷い話だなぁ、と、私は呟く。しかし実際には何にも感じていない自分にあれっ？　と思う。

無感動無感覚。ひどい世の中。でもいつものことだし。

自分の半径三メートル以内で起こること以外の事件に怒ったり泣いたりする必要なんてないよなぁ、そもそも関係無いし。と、さらに思ってまた私はあれっ？　と思う。と、そんなことでぼんやりしているあいだに隣の部屋からは漫才の声しかしなくなっていた。

やってるのかなぁ。

ソウの手が杏ちゃんの胸とか太腿とかあそこかを撫でる。当然のごとくそこは湿っていて、杏ちゃんはソウの首筋やら胸やらに口づける。どんな体位で？どんな顔で？杏ちゃんの細い腰は後ろからみたらさぞかし綺麗だろう。しろい肌も適度についた肉も、すごく触りごこちがいいのだろう。杏ちゃん相手だったら、私の時みたいな人非人なことは、きっとしない。

塩焼きそばがまずくなった。

食事の後片付けをすませ、ベッドの上に腰掛ける。オトコがはやく帰ってくることを願う。こんな日は酒だ。といいつつ毎晩飲んでいる。そしてさっさと眠るのに限る。そうだ、酒飲みながら、音楽聞こう。それから、きちんとお風呂で暖まってから寝よう。夜更かしは肌の敵だ。玄関脇のこぢんまりとしたキッチンには、備え付けの小型の冷蔵庫がついていて、その中にはちゃんと缶チューハイとビールが入っていた。この冷蔵庫には、漬物よりも八ムよりも、何よりもまず酒類が常備されているの

であった。テレビを消して、ラジカセをつける。ヘッドフォンをかぶって音量を最大にする。念仏を唱えているような曲が始まる。

「……猫魚を釣りにいきたい。隅田川にうちあげられた遺体。六本木は現実。ワタシ、現在っ子。じっとしている私、即身仏のように。……」

缶をあけてそのまま飲む。ギターの音が、耳を劈く。

「……部屋ではいつも熱唱。素性が分からん男子と朝まで熱唱。夜の手癖、どいつも同じ。笑っちゃうくらいにどいつも同じ……」

自分はもう若くは無いと思う。二十歳すぎたらあとは余生だ。誰かに怒られるかもしれないけれど、そんな風に諦めきってしまうことは、私にとってとても楽な道だった。

と、いきなりベランダに面したガラス戸が割れた。驚いた。その衝撃は、一瞬で私の全身の筋肉を緊張させた。呆気にとられた顔でそちらをみる。ヘッドフォンのせいでガラスの割れる音は聞こえなかった。しかしキラキラと夏のプールサイドのように光る欠片がスローモーションで目の前を落ちていった。ベランダ近くにあるベッドの上に座っていたため、降り注ぐガラスの破片を頭からかぶってしまったらしい。顔やら頭やらが切れている。額から垂れた血が目に入って、視界の一部が赤くなる。足元に、大き目の金鎚が落ちている。意味が分からない。台風直撃とか強盗とかもしやレイプ魔！？ と焦ってみる。混乱は一向に晴れない。ベランダの手すりの右端に、スカートの裾らしきひらひらしたものと、人間のものらしき足が下りてきた。人？ 目をこれでもかというくらい開き、口をぽかんとあけたまま、私は立ち上がった。ヘッドフォンのコードが限界まで伸びて無理に外れて下に落ちた。そこから音が漏れてロックンロールは続いていた。

杏ちゃんがいた。

制服姿だった。右手にドライヤーを持っていた。意味が分からない。

いや、隣の部屋との距離は近い。ベランダの手すりを乗り越えてやってきたのは明白だ。分からないのはなんでこんな時間になんで私の部屋のガラスを割ったのかということだ。ガラスって、高いのに……。けれどもそんな私の心配は一気に吹き飛ばされてしまった。杏ちゃんはその長い黒髪を揺らしながらドライヤーを振り回して私の部屋に侵入してきた。ごつくてでかいドライヤーをヌンチャクみたいに、いや違う、「キル・ビル」で栗山千秋が振り回していたやつの先端がドライヤーバージョンだ。杏ちゃんは一・五メートル程のコードの真ん中らへんを持ってぶんぶんドライヤーを振り回す。私は訳がわからず声も出ない。杏ちゃんの可愛らしい顔はゆがんでいる。怒っている。え？　私、何か悪いことした？　そりゃしただろう。杏ちゃんにソウとの浮気がばれたのだ。

「杏ちゃん、落ち着いて、ゆっくり話あ……」

ドライヤーがベッドのそばのインテリアランプにあたって私のほうに飛んできた。

「ひいっ……」

私は条件反射で目を閉じる。壁に当たって砕ける音。ランプの傘と電球が割れてこなごなになっていた。

杏ちゃんは本気だ。

「あんた、何ソウと寝てんだよ」

腹の奥底のマグマの煮えたぎる怒りの核から発せられたかのような低い声。重い声。ドスの効いたとか、そんな声。

「あ…杏ちゃ……ごめん…あやまるから……」

「ゴタクはいい。悔やめ。そして死ね」

杏ちゃんは私めがけてドライヤーを力いっぱい振り下ろす。愚鈍なプラスチック製電化製品は凶器と化し、私の脇腹にヒットした。体が後方へ吹っ飛ぶ。プラスチックだと思って見くびってはいけない。遠心力と

杏ちゃんの怒りが加わったそれはプロのボクサーに殴られる以上の破壊力があるはずだ。やばい。戦わなくては負ける。杏ちゃんは正当な理由を持った戦う女の子で私はその敵なのだ。

とにかく私は咳き込みながらも立ち上がろうとする。そんな暇を与えないように第二次攻撃が来る。顔面に直撃。私は立ち上がれず、壁に寄りかかって座っている体勢になる。杏ちゃんはドライヤーをブンブン振り回して私の頭をガンガン殴った。たとえ頭をはずれたとしてもそれは顔やら首やらに直撃した。私は必死で顔と頭を両手で庇う。それでもドライヤーはぶつかって頭にのめりこみ、その衝撃が脳髄に響く。破壊する。痛い痛い痛い。血が止まらねぇ。骨が砕けたかもしれない。脳細胞が死にまくっている。噴き出した血が両腕を温かく濡らしている。杏ちゃんは攻撃をやめない。私の呻き声と頭を砕き割ろうとする電化製品の音だけが部屋に響いている。ロックンロールはもう聞こえない。意識が遠くなる。これだけ殴られれば当然だ。しかし完全に意識を失う前に、杏ちゃんは攻撃の手を緩めた。ドライヤーを振り回すのをやめたのだ。私は殴られる衝撃から開放され、床に倒れた。朦朧とする。血がだらだら流れている。動けない。死ぬ。と思った。しかしそれは、殺される、の間違いだった。杏ちゃんは私の頭を持ち上げ、首にドライヤーのコードを巻きつけた。攻撃を緩めたのではなくて本気で殺そうとしているのだった。ほんの一瞬も躊躇せず、杏ちゃんは私の首を絞めた。そして私は完全に意識を失った。

トントントンと、音がする。まな板をたたく包丁の音。うすらぼんやり目がひらく。ミソ汁の臭い？
「隆？」
開けっ放しの部屋のドアから、お玉片手にオトコがふらりと入ってくる。腹には包丁が刺さっている。人間て、包丁が腹に刺さったままで歩けるのか？　いや、案外歩けるもんだろう、根性とかで？　私はとりあえず包丁抜かなきゃと思う。でも抜いたら死ぬんだっけ？
「もうすぐできるから」
「おなか、血が出てる」
「お前こそ、血まみれじゃないか」
何故かオトコはニタリと笑う。こんな人だったっけ？
「ひどいんだよ。さっき道端で通り魔に刺されちゃってさ」
「あ、そう」
「みそ汁、飲むよね？」
オトコが腹に力を入れたのか、ビュッっと鮮血が飛び散る。フローリングに新たな血溜まりが生まれる。他人にあんまり部屋を汚されると迷惑。
ベランダからは暖かい朝の光。床に散らばったガラスの破片がキラキラ輝いている。
「っていうか、なんで生きてんの？」
頭から垂れる血に混じって、赤茶色の固形物がぼろぼろとこぼれてくる。ぶにょぶにょしている。脳ミソだ。
オトコの目がマジになる。口元は笑っている。
「お前こそ、なんで生きてるの？」
「知らない」

引用楽曲
ZAZEN BOYS　Si Ge Ki